

レイキヤビクで 村上春樹 にも会った

日本・アイスランド学生会議に 参加した 佐藤真平さんの「冒険」

イギリスの北西にあり、グリーンランドに近い島、アイスランド。2003年9月、ここで初の日本・アイスランド学生会議が行われた。日本からの7人の学生の一人として、佐藤真平さん(総合政策学部・2年)も参加した。彼の目に映ったアイスランドはどんなものだったのだろうか。

(学生記者 小野光雄 || 総政3年)

ネットによる呼びかけ

始まりはネットからだった。国際交流基金のイベント情報に慶応大学の学生の呼びかけが掲載されていた。「ゼロからの出発」。このキャッチフレーズに心が反応した。それまで日本とアイスランドの間には学生交流はなかった。両国にそれぞれの大使館ができたのも2001年のことである。

中学生のときからアイスランドの音楽に興味があった、と佐藤さんは言う。Sigur Ros (シガーロス)、Bjork (ビョーク)というアイスランド出身のバンドの音楽を聞いていた。すべての音楽に寛容な独自のメロディーに惹かれて。

ことしの1月、JICE (日本アイスランド学生会議)が発足した。当初のメンバーは佐藤さんをいれて3人だけ。発足時から9月にアイスランドに訪問することを目標に、週1で代々木のオリピックセンター

で話し合いを続け、駐日アイスランド大使館や日本アイスランド協会も訪れた。

「脱水素社会宣言」―環境先進国 でみたある風景

日本アイスランド学生会議は、9月4日―14日の日程で行われた。日本からの7人と、アイスランドからは学生8人。

テーマは「新世紀のエネルギーの今、そして未来」についてだった。1998年、アイスランドは世界で初めて「脱水素社会宣言」をし、将来的にクリーンエネルギー社会の構築を宣言した国として有名である。

2週間の間、ホームステイ、アイスランド大学での講義、フィールドワーク、全体会議やパネルディスカッションもあった。活動の様子は現地の「フレッタブラジズ」という新聞でも紹介された、という。

フィールドワークでは環境整備の進んだ「環境先進国」としての現状

をまざまざと思い知らされた、と佐藤さん。観光地で有名な「ブルーラグーン」という天然温泉やデュルホラウェイというアイスランド最南端の崖などを見た。アイスランドでは何もない場所にポツンと観光地や建築物があることが多い。日本の現状をアイスランドの学生たちにも伝える中で両国の差異も見えてきた。

日本は火山国で水力エネルギーの需要はそれほど高くはない。ダム建設にしても住民の反対の声もある。資源がないので環境に悪いとわかっていても石油を燃やすという現状。一方、アイスランドは氷山や川が多く、水力エネルギーが国の生産量の90%を占めている。人口28万人の国内での人々の意識は高く、インフラ整備



あこがれの村上春樹さんを囲んで=レイキャビク文学祭会場

も早い。環境モデル国としても最適で、EUの環境政策の試みがアイスランド国内で実施されてもいる。一方で、ホームステイ先で見た彼らの意外な一面。ホストファミリーや生活を共にしたアイスランドの学生たちはほとんどちゃくする風もなく、電気はつけっぱなし、ゴミの分別もいい加減。「うーん、環境国として整って



るところを見たあとだっただけに、どうかこれは、と思いましたが佐藤さん、ちょっとショックだったようだ。

素直に疑問をぶつけるとアイスランド大の学生、マリアさんは「自分たちはどれだけ恵まれているか気づいていないから、環境に対する意識は実は低いんじゃないかしら」とボソッとつぶやいた。

「資源があるから、甘えている」佐藤さんがアイスランドに対して思ったことの1つである。

村上春樹、自著を日本語で読む —レイキャビク文学祭

「村上春樹とも会ったんですよ」彼もちょっと興奮気味である。

レイキャビク文学祭という催しが市内で開かれていた。そのゲストとして招待されていたのである。

すみれは突然恋に落ちた、広大な平原をまっすぐ突き進む童巻のような激しい恋……『スプートニクの恋人』を、村上春樹が日本語で朗読していた。レイキャビクでの「日本語の朗読」はかえって「文学的な効果」を高めるようで、とても印象的だったという。

「アイスランド・サガ」（北欧史伝長編・短編合わせ百数十編に及ぶ散文物語）を生んだお国柄である。いまも文学が盛んで一人当たりの書籍の発行部数は世界一だそうだ。

村上春樹作品は、英訳版のほかアイスランド語にもほとんどが翻訳されているという。村上さんは会場で



ホームステイ先でのパーティー。左から2人目が佐藤さん

もサイン攻めにあう人気だった。佐藤さんたちも、「世界のムラカミ・ハルキ」と一緒に記念撮影をする光栄に浴したという。

捕鯨国の女性進出

女性の社会進出も進んでいる。滞在期間中に会ったフィンガドッティル前大統領は世界で初めての女性の大統領だった。自国に対する意識も高い。海外の大学を卒業後、国に戻ってきて働く人もいる。国の小ささや人口が少ないためにコミュニティ

が狭い。親族同士の団結が強く、事あるたびに集結するのだという。アイスランド人は陽気で行動を共にしていて、気分がよくなつて国家を歌うこともあった。佐藤さんが頻繁に耳にした言葉に「This is very Icelandic」というフレーズがある。この言葉を使うときの彼らの顔は自信に満ちている。それほど愛国心の強さを表しているのだろう。

食生活は水産国だけあつて魚料理が多い。焼いたり、煮たりしてその上にサワークリームのようなものをかける。アイスランドの家庭ではヨーグルトに牛乳をかけて食べる習慣がある。祖先、海の民族バイキングの食べ方らしい。捕鯨国という日本との共通点もある。クジラの刺身も食べるといふ。1キロあたりの相場が1100円前後というのにも驚きである。

「未来の森」で友情の植樹

「夢の国ですね。行く前の神秘的

なイメージは現実味が増すほど陳腐じゃなかった。イメージのままだった」。アイスランドの自然、文化、いろいろなものにふれて感じたことだ。日本に帰ってきて思い起こす。「こちらの文化を伝えるということがどれだけ難しいかわかった。いろいろな人の協力があつてお互いに学んだことも多い。交流は大事なこと成果が大きいから。興味のあることをするために多大な努力がいることもわかった」



荒野に友情の植樹

最終日。15人の学生たちは、「未来の森」と呼ばれている地域に植樹をした。人間の背丈ほどの小さな木々しかない、ところどころ岩肌が見える荒野だった。岩場を避けてシャベルで土を掘る作業も難渋したが、1時間ほどで20本近くの苗木を植えた。

植樹が終わったあと、アイスランドと日本の国旗を空にかざした。そして「荒野にて」という唄をアイスランド語で歌った。日本にいるときから練習していた。荒野に培われた小さな樹と大きな友情。日本から遠い国で結ばれたもの。これからもつなぎ続けていきたい。佐藤さんの思いである。

植樹をした場所のすぐそばにはアイスランド日本協会の建物が建設される予定だ。佐藤さんは言う。

「何年もあとの会議のときに育つてくれればいい。自分の子供が生まれたら第1回の会議のときに僕たちが植えた木を見せたい」